

中国の文化Ⅸ 第5回

秦代

亡国の民が伝えた英雄伝説

これは、十三世紀末から十四世紀
初めにかけて、イン格蘭ドの支配
に抵抗して、スコットランドの独立
のために戦った英雄の銅像である。
これは誰か？



亡国の民が伝えた英雄伝説

スコットランドの国民的英雄の一人にウィリアム・ウォレス (Sir

William Wallace 一二七二?～一二三〇五) がいる。

スコットランドがイングリランド王エドワード一世の支配下にあった一三世紀末から一四世紀初めにかけて、ウォレスはスコットランドの独立のために戦った。

彼は志を遂げることなく、最後は捕らえられてロンドンで刑死したが、その活躍は一五世紀に盲目の吟遊詩人ブラインド・ハリー (Blind Harry) が歌った叙事詩によって後世へと語り伝えられていった。





スコットランド

イギリス

アイルランド

ロンドン
London

オランダ

デンマーク

ベルリン
Berlin

ドイツ

プラハ
Praha
チェコ共和国

ベルギー

パリ
Paris

フランス

オーストリア

ポーランド

スロバキア

ハンガリー

クロアチア

イタリア

ローマ
Roma

バルセロナ
Barcelona

マドリード
Madrid

ポルトガル

スペイン

バルト海

エストニア

ラトビア

リトアニア

モスクワ
Moskva

ベラルーシ

ウクライナ

モルドバ

ルーマニア

セルビア

ブルガリア

ギリシャ

イスタンブール
Istanbul

黒海

トルコ



Wallace Monument - Stirling, Scotland

亡国の民が伝えた英雄伝説

中国にもこれとよく似た英雄伝説がある。荊軻の物語である。

戦国時代の末期、法家思想に基づく富国強兵策によって唯一の超大国となった秦は、秦王政（のちの始皇帝）の時代、その圧倒的な軍事力によって東方六国への侵攻を始める。

迫りくる秦の脅威を前に、燕国は国の命運を一人の刺客に託す。

たった一本の匕首で大国・秦の野望を打ち砕こうとした荊軻。秦による天下統一の陰で、亡国の民が伝えた英雄伝説を紹介する。



荊軻義士像

講義内容

第一節 秦——建国から天下統一まで

第二節 史書が伝える秦王政（始皇帝）暗殺未遂事件

第三節 亡国の民が伝えた物語

第一節

秦

建国から天下統一まで





秦 900BC-207BC

秦

非子、周の孝王から秦の地を与えられる(BC900年頃)



非子、周の孝王から秦の地を与えられる(900BC頃)

内乱平定の功により、東周の平王から岐山以西の地を与えられ諸侯となる(771BC)

商鞅が法家思想による改革を断行(商鞅の変法 359BC,350BC)

商鞅と法家思想

商鞅は衛国の公子の出身。

はじめ魏に仕えたが、秦の孝公が内外に広く人材を求めていると聞き、魏を去り秦に行った。富国強兵の術を説いて孝公の信任を得、前三五九年と前三五〇年の二度にわたり、「商鞅の変法」と呼ばれる大改革を行った。

辺境の小国であった秦は、これにより一躍強国へとの上っていく。



商鞅(B.C.390?~B.C.338)

「手柄ある者には必ず褒賞を与え、
罪を犯す者は容赦なく処罰せよ」
商鞅らが唱えたこの法家思想は、
いまでも四字成語として使われている。
この四字成語とは何か？



商鞅(B.C.390?~B.C.338)

信賞必罰

手柄ある者には必ず褒賞を与え、
罪を犯す者は容赦なく処罰せよ



商鞅(B.C.390?~B.C.338)

令令民爲什伍而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首同賞匿姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者各以率^{律音}受上爵爲私鬪者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令既具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令行於民甚年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令行之十年秦民大說道不拾遺山無盜賊家給

商鞅の「信賞」

令、既に具わるも、未だ布せず。民の己を信ぜざるを恐る。

乃ち三丈の木を国都の市の南門に立て、民の能く北門に徙し置く者を募り、十金を予う。民之を怪しみて敢えて徙すなし。復び曰く「能く徙す者には五十金を予う」と。一人之を徙す者あり。輒ち五十金を予え、以って欺かざるを明らかにす。卒に令を下せば、令民に行わる。

令令民爲什伍而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首同賞匿姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者各以率^律受上爵爲私闢者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令既具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令行於民甚年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令行之十年秦民大說道不拾遺山無盜賊家給

商鞅の「信賞」

法令はできたがいすぐに布告はしなかった。自分が信用されていない
と思ったからである。

そこで、七メートルほどの木材を都の市場の南門に立て、「北門まで運んだ者には十金を与える」と、人を募った。ところが人々はこれは変だと思い、誰も運ぼうとしない。そこで「運んだ者には五十金を与えろ」とした。ある人がこれを運ぶと、五十金を与え、嘘ではないことを明らかにした。こうして法令を出すと、人々はそれに従うようになった。

令令民爲什伍而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首同賞匿姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者各以率律音受上爵爲私鬪者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令旣具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令行於民甚年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令行之十年秦民大說道不拾遺山無盜賊家給

商鞅の「必罰」

人足民勇於公戰怯於私鬪鄉邑大治秦民初言令不便者有來言令便者衛鞅曰此皆亂化之民也盡遷之於邊城其後民莫敢禁而その年、秦の民の国都に之（ゆ）きて初令の便ならざるを言う者、千を以って数う。是に於いて太子、法を犯す。衛鞅曰く、「法の行われざるは、上より之を犯せばなり」と。將に太子を法せんとするも、太子は君の嗣（よつぎ）なり。刑を施すべからず。其の傅・公子虔を刑し、其の師・公孫賈を黥す。

明日、秦人皆趨る。

令令民爲什伍而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首同賞匿姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者各以率律音受上爵爲私鬪者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令旣具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令行於民甚年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令行之十年秦民大說道不拾遺山無盜賊家給

商鞅の「必罰」

人足民勇於公戰怯於私鬪鄉邑大治秦民初言令不便者有來言令便者衛鞅曰此皆亂化之民也盡遷之於邊城其後民莫敢禁而その年、秦の人々が都に集まり、法令に不満を唱える者が数千人を数割えた。その頃、太子が法を犯した。衛鞅は「法令が守られないのは、上に立つものがこれを犯すからだ」と考え、太子を罰しようとしたが、太子は世継ぎであり、刑罰を加えるわけにはいかない。そこでその師である公子虔と公孫賈に刑罰を加えた。

翌日、秦の人々はみな逃げ去った。

令令民爲什伍而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首同賞匿姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者各以率^{律音}受上爵爲私鬪者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令旣具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令行於民甚年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令行之十年秦民大說道不拾遺山無盜賊家給

人足民勇於公戰怯於私鬪鄉邑大治秦民初言令不便者有來言令便者衛鞅曰此皆亂化之民也盡遷之於邊城其後民莫敢議令於是以鞅爲大良造將兵圍魏安邑降之居三年作爲築冀闕宮庭於咸陽秦自雍徙都之而令民父子兄弟同室內息者爲禁而集小都鄉邑聚爲縣置令丞凡三十一縣爲田開阡陌封疆而賦稅平平斗桶^{鄭玄曰斗桶今之斛也}權衡丈尺行之四年公子虔復犯約制之居五年秦人富彊天子致胙於孝公諸侯畢賀其明年齊敗魏與魏^{與魏者人之有疾非魏并秦秦即并魏何者魏居嶺阨之西都}令、之を行ふこと十年、西秦の民大いに説ぶ。道に遺を拾わず、山に盜賊なく、家は給し人は足り、民は公戦に勇にして、私鬪に怯え、郷邑大いに治まる。

令令民爲什伍而相收司連坐不告姦者腰斬告姦者與斬敵首同賞匿姦者與降敵同罰民有二男以上不分異者倍其賦有軍功者各以率^律受上爵爲私鬪者各以輕重被刑大小僇力本業耕織致粟帛多者復其身事末利及怠而貧者舉以爲收孥宗室非有軍功論不得爲屬籍明尊卑爵秩等級各以差次名田宅臣妾衣服以家次有功者顯榮無功者雖富無所芬華令旣具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令行於民甚年秦民之國都言初令之不便者以千數於是太子犯法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公子虔黥其師公孫賈明日秦人皆趨令行之十年秦民大說道不拾遺山無盜賊家給

人足民勇於公戰怯於私鬪鄉邑大治秦民初言令不便者有來言令便者衛鞅曰此皆亂化之民也盡遷之於邊城其後民莫敢議令於是以鞅爲大良造將兵圍魏安邑降之居三年作爲築冀闕宮庭於咸陽秦自雍徙都之而令民父子兄弟同室內息者爲禁而集小都鄉邑聚爲縣置令丞凡三十一縣爲田開阡陌封疆而賦稅平平斗桶^{今之斛也}權衡丈尺行之四年公子虔復犯約制

商鞅の「信賞必罰」の成果

法令が施行されて十年、秦の人々は大いに喜んだ。道に落し物があつても拾う者はなく、山に盗賊はなく、暮らしは豊かになり、戦争があれば勇敢に戦ったが、喧嘩をすることはなく、地方の治安も大変良くなった。

戦国時代 BC453-BC221



「信賞必罰」の法家思想によって、
秦の富国強兵を実現した商鞅は、そ
の後、どのような人生を歩んだか？



商鞅(B.C.390?~B.C.338)

商鞅の末路

秦の孝公卒し、太子立つ。

公子虔の徒、商君反かんと欲すと告げ、吏を發して商君を捕う。

商君、亡げて関下に至り、客舎に舎(やど)らんと欲す。客人、其れ是れ商君たるを知らずして曰く、「商君の法、人を舎らせるに驗なき者は之に坐す。」

商君、喟然として嘆じて曰く、「嗟乎、法を為すの敝一に此に至るか。」

司馬遷『史記』商君列伝

不出書曰恃德者昌恃力者亡君之危若朝露尚將欲延年益壽乎則何不歸十五都灌園於鄙勸秦王顯巖穴之士養老存孤敬父兄序有功尊有德可以少安君尚將貪商於之富寵秦國之教畜百姓之怨秦王一旦捐賓客而不立朝秦國之所以收君者豈其微哉亡可翹足而待商君弗從後五月而秦孝公卒太子立公子虔之徒告商君欲反發吏捕商君商君亡至関下欲舍客舍客人不知其是商君也曰商君之法舍人無驗者坐之商君喟然歎曰嗟乎爲法之敝一至此哉去之魏魏人怨其欺公子卬而破魏師弗受商君欲之他國魏人曰商君秦之賊秦彊而賊入魏弗歸不可遂內秦商君既復入秦走商邑與其徒屬發邑兵出擊鄭鄭縣也秦發兵攻商君殺之於鄭黽池徐廣曰黽或作彭秦惠王車裂商君以徇曰莫如商鞅者遂滅商君之家

商鞅の末路

秦の孝公が亡くなり、太子が擁立された。公子虔らは、商鞅が反乱を起こそうとしている訴え、役人を派遣して商鞅を捕らえようとした。

商鞅は逃げて、国境近くの旅館に泊ろうした。ところが旅館の主人は彼が商鞅だと知らず、こう言った。

「商鞅様の法令で、証明書のない人を泊まらせると同罪になるのです」

商鞅はため息をついて言った。「ああ、法令の弊害は、こんなところにもまで及んでいたのか。」

司馬遷『史記』商君列伝

不出書曰恃德者昌恃力者亡君之危若朝露尚將欲延年益壽乎則何不歸十五都灌園於鄙勸秦王顯巖穴之士養老存孤敬父兄序有功尊有德可以少安君尚將貪商於之富寵秦國之教畜百姓之怨秦王一旦捐賓客而不立朝秦國之所以收君者豈其微哉亡可翹足而待商君弗從後五月而秦孝公卒太子立公子虔之徒告商君欲反發吏捕商君商君亡至闕下欲舍客舍客舍人不知其是商君也曰商君之法舍人無驗者坐之商君喟然歎曰嗟乎爲法之敝一至此哉去之魏魏人怨其欺公子卬而破魏師弗受商君欲之他國魏人曰商君秦之賊秦彊而賊入魏弗歸不可遂內秦商君既復入秦走商邑與其徒屬發邑兵出擊鄭鄭縣也秦發兵攻商君殺之於鄭黽池徐廣曰黽或作彭秦惠王車裂商君以徇曰莫如商鞅者遂滅商君之家

商鞅と法家思想

二度の大改革によって、秦を一躍強国へとのし上がらせた商鞅であったが、その冷徹な嚴罰主義は多くの人々の恨みを買ひ、孝公の死後、反対派に謀反の罪をきせられ、車裂きの極刑に処せられた。

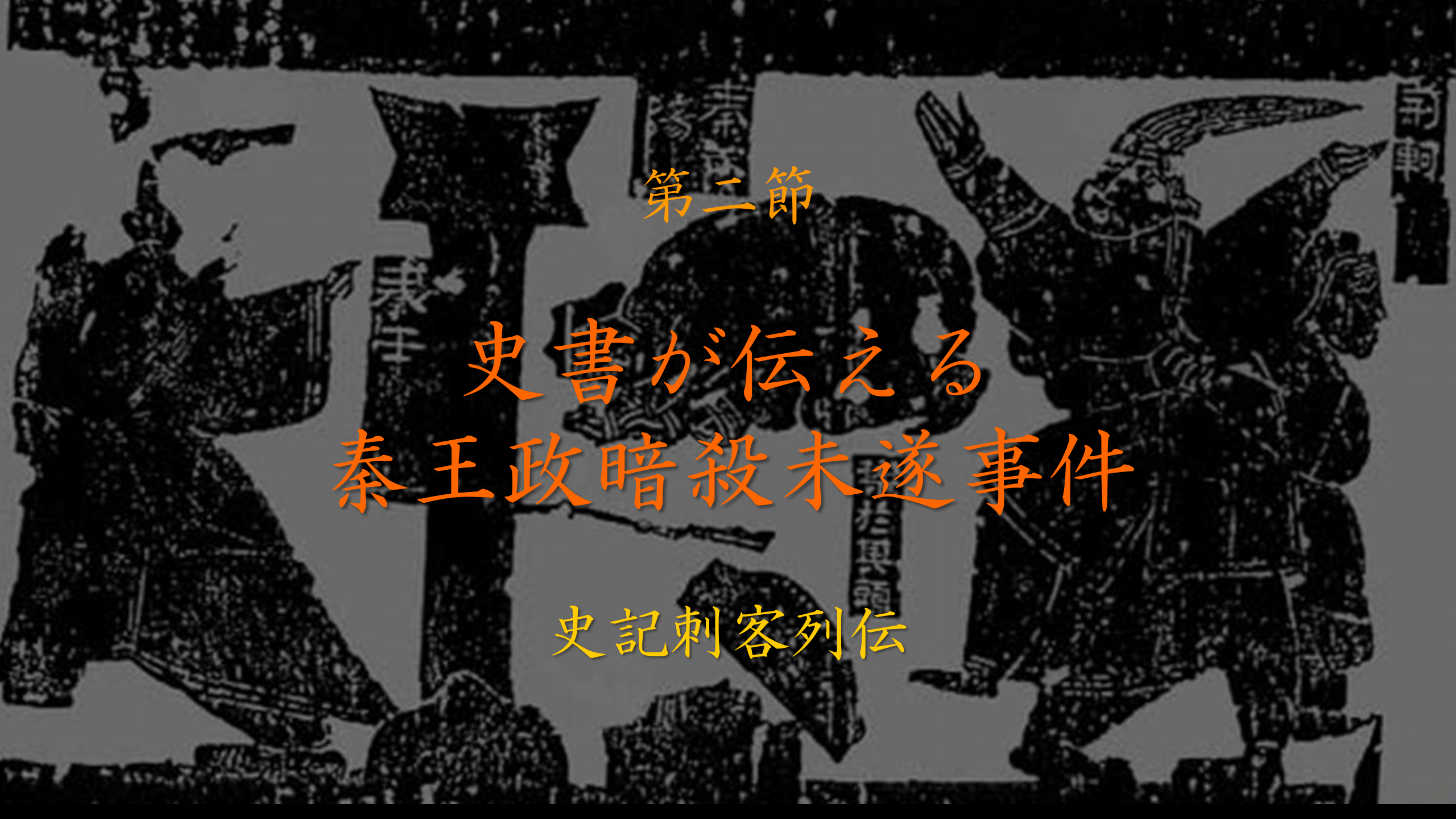
しかし、商鞅の亡き後も、秦は法家思想による中央集権化と富国強兵策を推し進め、東方の六国を凌駕する軍事大国となっていた。



商鞅(B.C.390?~B.C.338)

戦国時代 BC453-BC221



The background is a black and white rubbing of a stone inscription, likely from the Shiji. It depicts a scene with several figures. On the left, a figure in a long robe is shown in profile, possibly a scholar or official. In the center, there is a large, dark, irregular shape that could be a tomb or a large object. To the right, a figure is shown in a dynamic pose, possibly a warrior or a person in a state of distress. There are several vertical inscriptions in Chinese characters scattered throughout the scene.

第二節

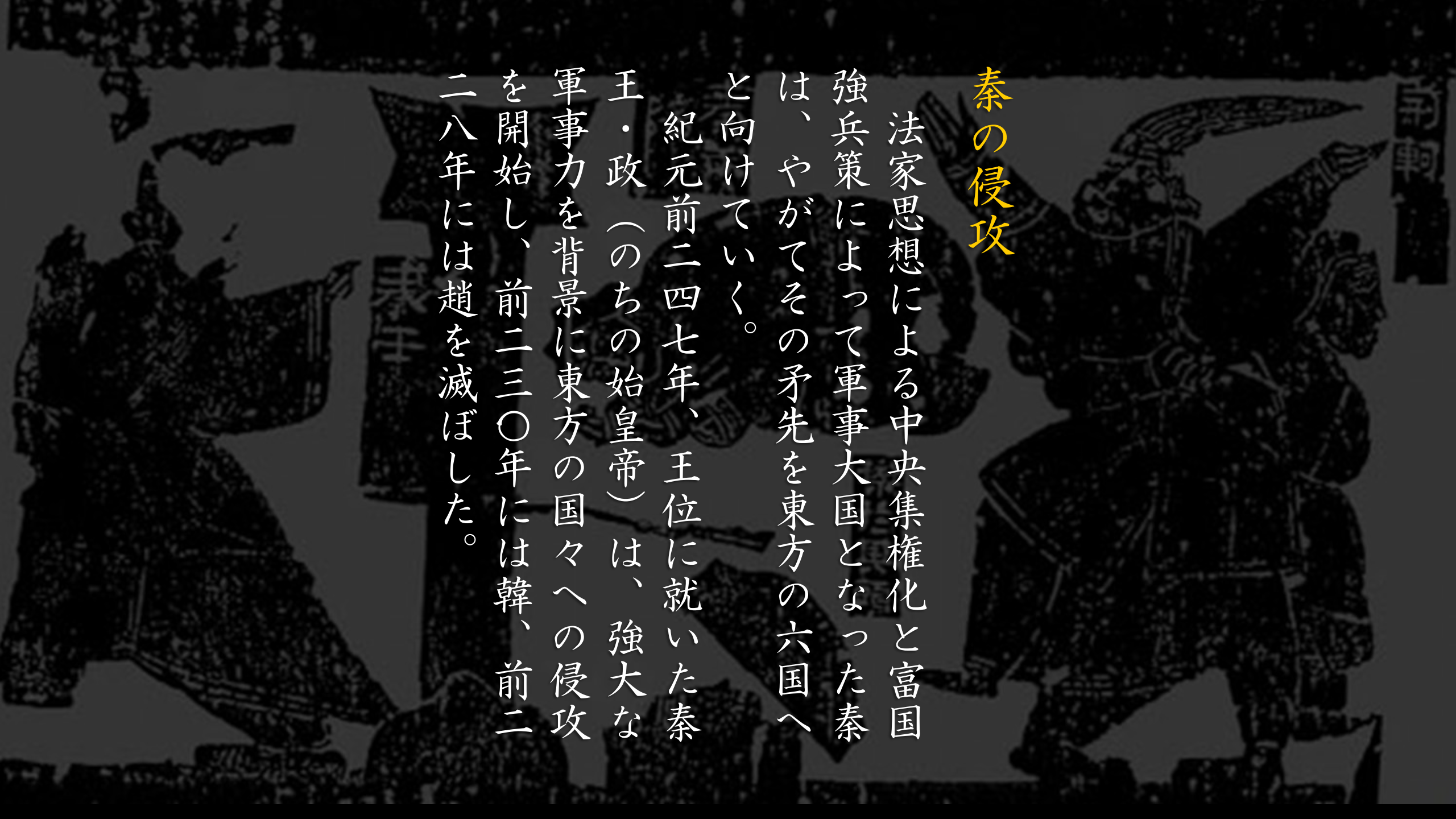
史書が伝える 秦王政暗殺未遂事件

史記刺客列伝

秦の侵攻

法家思想による中央集権化と富国強兵策によって軍事大国となった秦は、やがてその矛先を東方の六国へと向けていく。

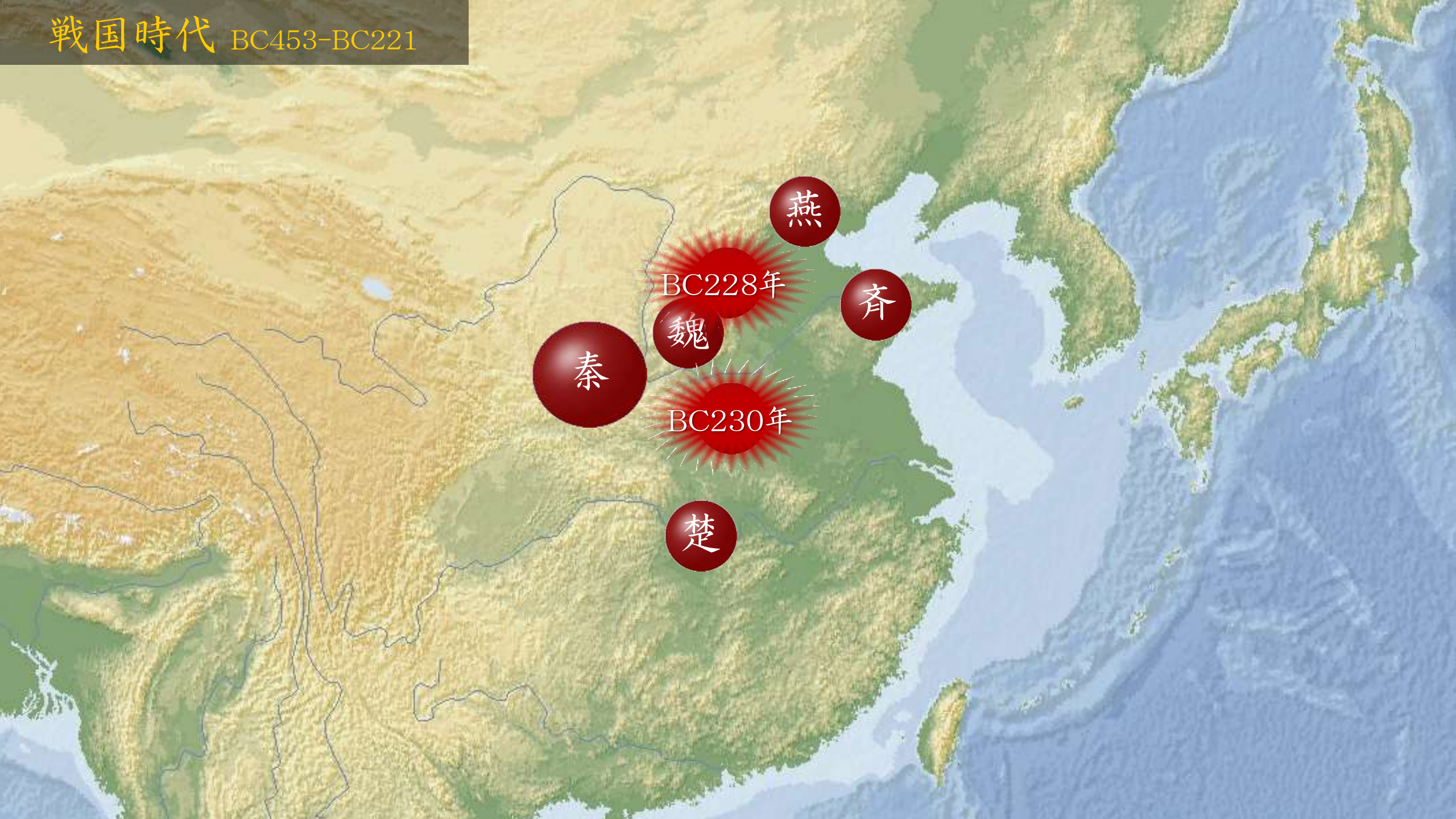
紀元前二四七年、王位に就いた秦王・政（のちの始皇帝）は、強大な軍事力を背景に東方の国々への侵攻を開始し、前二三〇年には韓、前二二八年には趙を滅ぼした。



1600BC	殷 1600BC頃-1046BC
1500BC	
1400BC	
1300BC	
1200BC	
1100BC	周 1046BC-771BC
1000BC	
900BC	
800BC	
700BC	
600BC	春秋戦国時代 770BC-221BC
500BC	
400BC	
300BC	
200BC	
100BC	秦 221BC-207BC
0	漢 206BC-220AD
100	
200	
300	
400	
500	魏 220-265
600	蜀 221-263
700	呉 222-280
800	晋 265-316
900	五胡十六国時代
1000	東晋 317-420
1100	北朝 439-589
1200	南朝 420-589
1300	隋 581-619
1400	唐 618-907
1500	
1600	
1700	
1800	
1900	五代十国 907-960
2000	遼
	北宋 960-1127
	金 1115-1234
	南宋 1127-1279
	元 1271-1368
	明 1368-1644
	清 1616-1912
	中華民国 1912-1949
	中華人民共和国 1949-

秦が東方の韓、趙を滅ぼす(BC230～BC228)

戦国時代 BC453-BC221



燕

BC228年

魏

齊

秦

BC230年

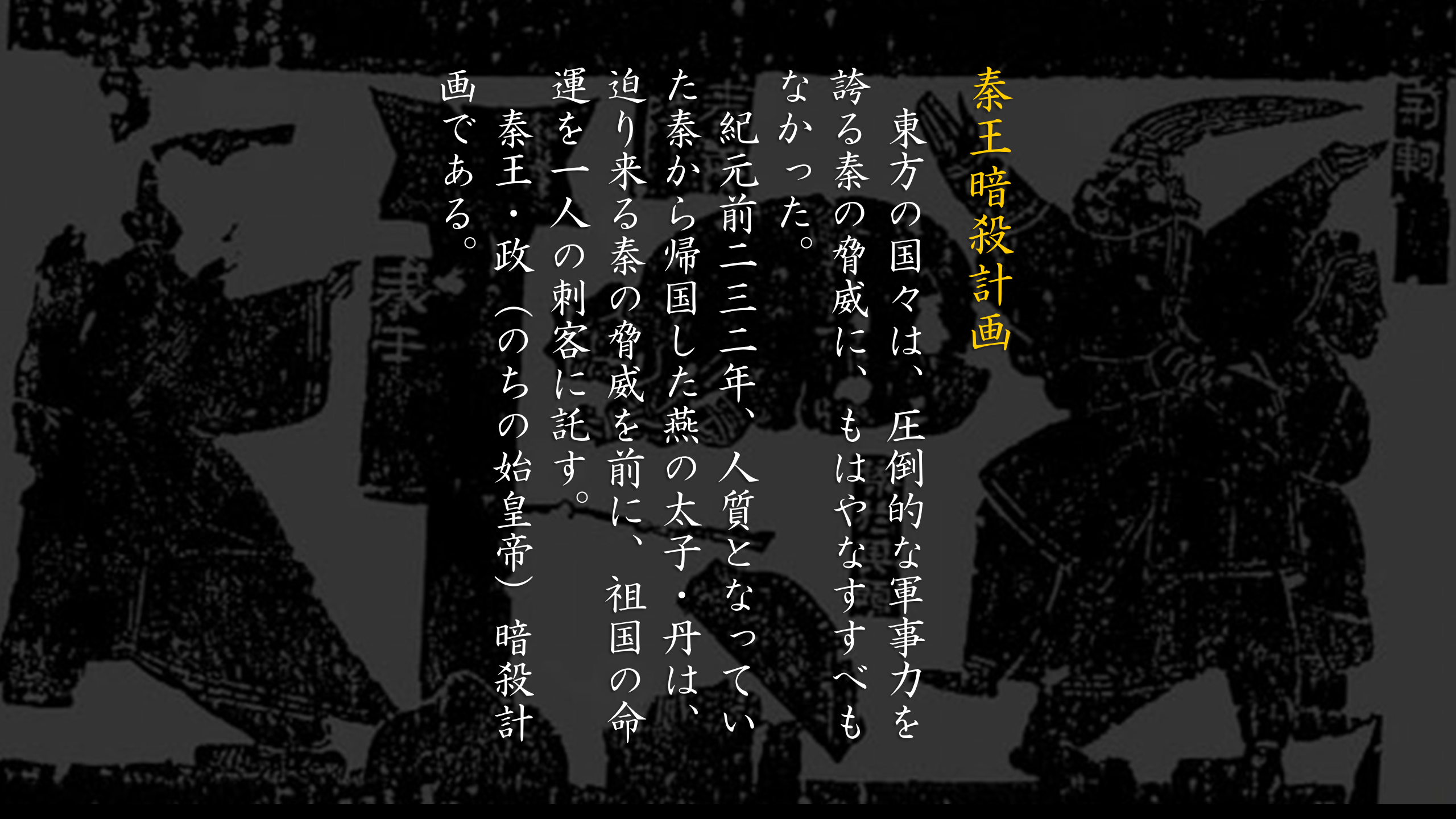
楚

秦王暗殺計画

東方の国々は、圧倒的な軍事力を誇る秦の脅威に、もはやなすすべもなかった。

紀元前二三二年、人質となっていた秦から帰国した燕の太子・丹は、迫り来る秦の脅威を前に、祖国の命運を一人の刺客に託す。

秦王・政（のちの始皇帝）暗殺計画である。





武氏祠画像石荆軻刺秦图（山东省嘉祥县·後漢元嘉元年(151年)）



武氏祠画像石荆軻刺秦图拓本（山东省嘉祥县·後漢元嘉元年(151年)）



〔漢〕司馬遷『史記』刺客列伝

前漢の史官・司馬遷は、神話の時代から前漢に至るまでの歴史を、王侯貴族から庶民にいたる様々な人物を通して描いた『史記』を著した。

その中に刺客すなわちテロリストの事績を記録した刺客列伝がある。秦王政を暗殺しようとした刺客・荊軻の伝もそこに収められている。

史記八十五

史記八十六

刺客列傳第二十六

曹沫者魯人也。以勇力事魯莊公。莊公好力。曹沫爲魯將。與齊戰三敗。北魯。莊公懼。乃獻遂邑之地。以和。猶復以爲將。齊桓公許與魯會于柯。而盟。桓公與莊公既盟於壇上。曹沫執匕首。劫齊桓公。桓公左右莫敢動。而問曰。子將何欲。曹沫曰。齊強魯弱。而大國侵魯。亦以甚矣。今魯城壞。卽壓齊境。君其圖之。桓公乃許。盡歸魯之侵地。既已。言曹沫投其匕首。下壇。北面就羣臣之位。顏色不變。辭令如故。桓公怒。欲倍其約。管仲曰。不可。夫貪小利。以自快。棄信於諸侯。失天下之援。不如與之。於是桓公乃遂割魯侵地。曹沫三戰所亡地。盡復予魯。其後百六十有七年。而吳有專諸之事。專諸者。吳堂邑人也。伍子胥之亡楚而如吳也。知專諸之能。伍子

秦王暗殺計画

燕の太子・丹、秦に質(ち)たり。
亡れて燕に帰る。

曰曩者吾與論劔有不稱者吾目之試往是宜去不敢留使使往
之主人荆卿則已駕而去榆次矣使者還報蓋聶曰固去也吾曩
者目攝之荆軻游於邯鄲魯句踐與荆軻博爭道魯句踐怒而叱
之荆軻嘿而逃去遂不復會荆軻既至燕愛燕之狗屠及善擊筑
者高漸離荆軻嗜酒目與狗屠及高漸離飲於燕市酒酣以往高
漸離擊筑荆軻和而歌於市中相樂也已而相泣旁若無人者荆
軻雖游於酒人乎徐廣曰飲酒之人然其爲人沈深好書其所游諸侯盡與
其賢豪長者相結其之燕燕之處士田光先生亦善待之知其非
庸人也居頃之會燕太子丹質秦亡歸燕燕太子丹者故嘗質於
趙而秦王政生於趙其少時與丹驩及政立爲秦王而丹質於秦
秦王之遇燕太子丹不善故丹怨而亡歸歸而求爲報秦王者國
小力不能其後秦日出兵山東以伐齊楚三晉稍蠶食諸侯且至

於燕燕君臣皆恐禍之至太子丹患之問其傅鞠武武對曰秦地
徧天下燕之左太子丹患之問其傅鞠武武對曰秦地
趙に質たり。而うして秦王政、趙に
生まれて、其の少き時、丹と驩ぶ。
政の立ちて秦王と為るに及びて、丹
は秦に質たり。秦王の燕の太子・丹
を遇すること善からず。故に丹は怨
んで亡れ帰る。

秦王暗殺計画

燕の太子である丹は、秦に人質と
なっていたが、逃げて燕に帰った。

曰曩者吾與論劔有不稱者吾目之試往是宜去不敢畱使使往
之主人荆卿則已駕而去榆次矣使者還報蓋聶曰固去也吾曩
者目攝之荆軻游於邯鄲魯句踐與荆軻博爭道魯句踐怒而叱
之荆軻嘿而逃去遂不復會荆軻既至燕愛燕之狗屠及善擊筑
者高漸離荆軻嗜酒目與狗屠及高漸離飲於燕市酒酣以往高
漸離擊筑荆軻和而歌於市中相樂也已而相泣旁若無人者荆
軻雖游於酒人乎徐廣曰飲酒之人然其爲人沈深好書其所游諸侯盡與
其賢豪長者相結其之燕燕之處士田光先生亦善待之知其非
庸人也居頃之會燕太子丹質秦亡歸燕燕太子丹者故嘗質於
趙而秦王政生於趙其少時與丹驩及政立爲秦王而丹質於秦
秦王之遇燕太子丹不善故丹怨而亡歸歸而求爲報秦王者國
小力不能其後秦日出兵山東以伐齊楚三晉稍蠶食諸侯且至

於燕丹は、むかし趙に人質となつてい秦地
た。秦王の政も趙に生まれ、幼いこ
ろ丹と仲が良かった。
政が秦王になると、丹は秦に人質と
なった。ところが（幼なじみだっ
たはずの）秦王が冷淡な扱いをした
ため、恨んだ丹は（燕に）逃げ帰っ
た。

秦王暗殺計画

燕の太子・丹は荊軻という士に秦王・政の暗殺を託す。

荊軻は、秦王に謁見するため、二つの献上品を用意する。一つは督亢（河北省涿県の東南）の地図。地図の献上は領土の割譲を意味する。

もう一つは、秦の樊於期將軍の首。秦王の怒りを買って、一族を皆殺しにされた樊於期將軍は、秦を逃れて燕に亡命していた。

荊軻

樊於期頭

秦王





中国映画「異聞始皇帝謀殺（秦頌）」（1996年制作）より

秦王暗殺計画

紀元前二二七年、ついに秦王暗殺の日がやってくる。

督亢の地図と樊於期將軍の首を携えた荊軻は、計略通り秦王から謁見の機会を与えられる。

秦王に近づいた荊軻は、督亢の地図に隠した匕首で秦王を刺殺しようとする。





燕国講和の使者荊軻よ 陛下のお召しである

中国映画「異聞始皇帝謀殺（秦頌）」（1996年制作）より

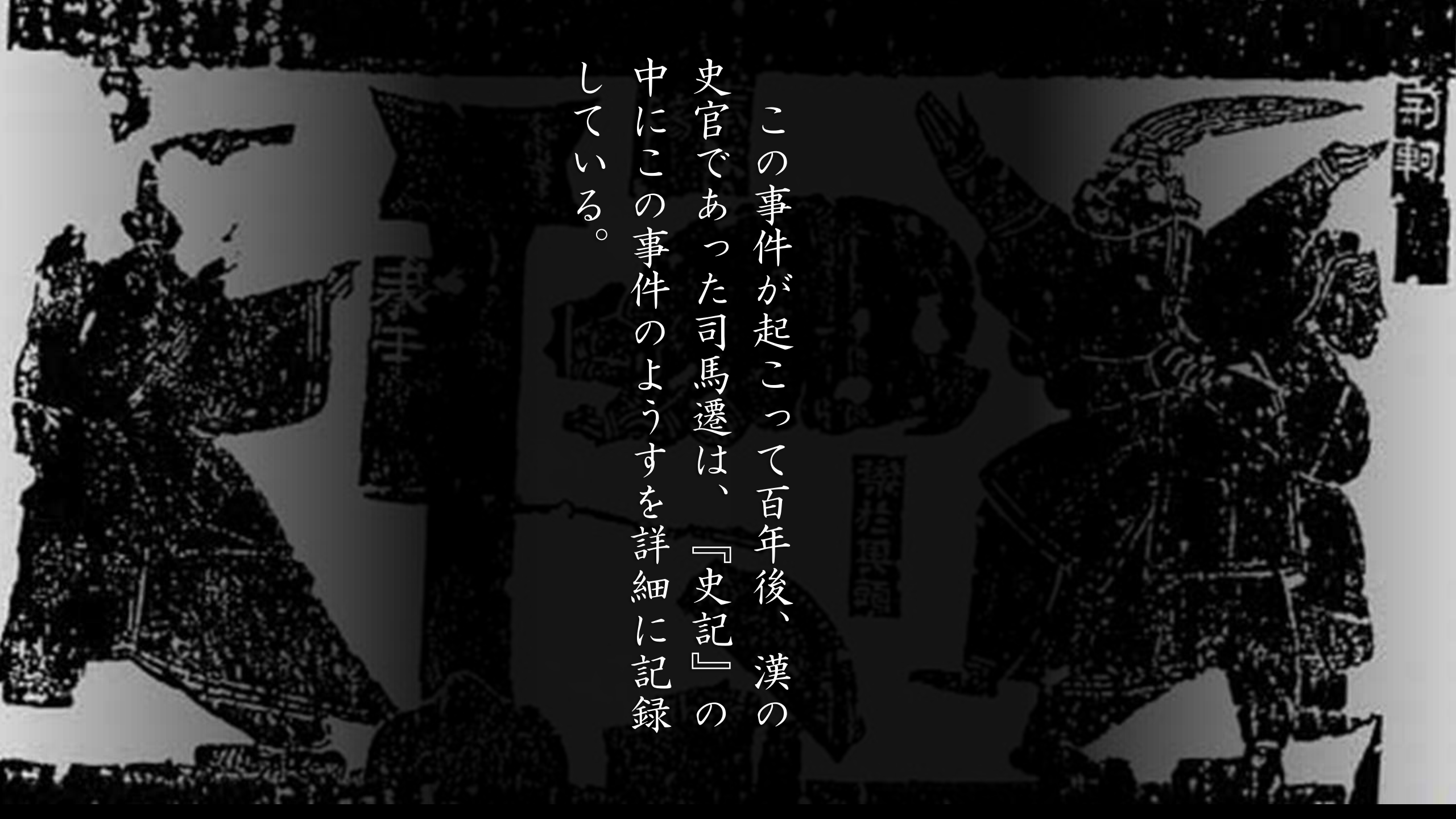
第三節

亡国の民が伝えた物語

燕丹子の世界

司馬遷

この事件が起こって百年後、漢の史官であった司馬遷は、『史記』の中にこの事件のようすを詳細に記録している。



秦王暗殺未遂事件

：：軻、既に地図を取りて之を奏
(すす)む。秦王、図を発く。図窮り
て匕首見わる。因りて左手もて秦王
の袖を把り、而して右手に匕首を持
ちて之を搵(さ)す。未だ身に至らず。
列給貢職如郡縣而得奉守先王之宗廟恐懼不敢自陳謹斬樊
於期之頭及獻燕督亢之地圖函封燕王拜送于庭使使以聞大
王唯大王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮
荆軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色
變振恐羣臣怪之荆軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗
見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取
舞陽所持地圖軻既取圖奏之秦王發圖圖窮而匕首見因左手
把秦王之袖而右手持匕首搵之未至身秦王驚自引而起袖絕
拔劍劍長操其室時惶急劍堅故不可立拔荆軻逐秦王秦王環
柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不
得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時
不及召下兵以故荆軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共
搏之秦王驚起自引引以起袖絕
絕つ。劍を抜かんとす。劍長し。其
の室を操る。時に惶急にして劍堅し。
故に立ちどころに抜くべからず。荆
軻、秦王を逐う。秦王、柱を環りて
走ぐ。

秦王暗殺未遂事件

……荆軻は地図を取り出し、献上した。秦王が地図を開く。開き終わると、匕首が現れた。左手で秦王の袖をつかみ、右手に匕首を持って刺

そうとしたが、届かなかった。

列給貢職如郡縣而得奉守先王之宗廟恐懼不敢自陳謹斬樊
於期之頭及獻燕督亢之地圖函封燕王拜送于庭使使以聞大
王唯大王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮
荆軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色
變振恐羣臣怪之荆軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗
見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取
舞陽所持地圖軻既取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手
把秦王之袖而右手持匕首揕之未至身秦王驚自引而起袖絕
拔劒劒長操其室時惶急劒堅故不可立拔荆軻逐秦王秦王環
柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時
不及召下兵以故荊軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共
搏之秦王が驚いて立ち上がると、袖が
切れた。劍を抜こうとしたが、長す
ぎる。鞘から抜こうとするが、堅く
てなかなか抜けない。荊軻は秦王を
追い、秦王は柱の周りを回って逃げ
た。

秦王暗殺未遂事件

群臣、皆愕く。卒(にわ)かに意(おも)もわざること起これば、尽く其の

度を失う。而して秦の法、群臣の殿

上に侍する者は、尺寸の兵をも持つ

を得ず。諸郎中は兵を執るも、皆殿

下に陳す。詔有りて召すに非ざれば、

上るを得ず。九之地圖函封燕王拜送于庭使使以聞大

王唯大王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮

荆軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色

變振恐羣臣怪之荆軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗

見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取

舞陽所持地圖軻既取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手

把秦王之袖而右手持匕首擲之未至身秦王驚自引而起袖絕

拔劔劔長操其室時惶急劔堅故不可立拔荆軻逐秦王秦王環

柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時

不及召下兵以故荆軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共

搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也秦王方環柱走

卒惶急不知所爲左右乃曰王負劔負劔遂拔以擊荆軻斷其左

股荆軻廢乃引其匕首以擲秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八

創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生

劫之必得約契以報太子也

急なる時に方(あ)たり、下兵を召

すに及ばず。

秦王暗殺未遂事件

臣下たちはみな愕然とした。突然の出来事に、どうしていいかわからない。しかも秦の法令では、宮殿に仕える臣下は、わずかな武器も携えてはならないことになっていた。郎中たちは武器を持っていたが、みな宮殿の外に並び、王の命令がなければ宮殿内に入ることは許されない。突然の出来事だったので、宮殿の外に命令を出すこともできなかつた。秦王發圖窮而七首見因左手把秦王之袖而右手持匕首權之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劔長操其室時惶急劔堅故不可立拔荆軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆慢卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時

不及召下兵以故荆軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劔負劔遂拔以擊荆軻斷其左股荆軻廢乃引其匕首以擲秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得約契以報太子也漢書地理志曰荆軻散手一語而事不就軻死也於是左右既殺軻秦王不怡者良久已而論功賞羣臣及當坐者各有差而賜夏無且黃金二百溢曰無且愛我乃以藥囊提荆軻也於是秦王大怒益發兵詣趙詔王齎軍以伐燕十月而拔趙

秦王暗殺未遂事件

故を以て荊軻乃ち秦王を逐う。而して卒かに惶急して、以て軻を撃つ無くして、手を以て共に之を搏つ。

是の時、侍医・夏無且、其の奉ずる

所の藥囊を以て荊軻に提(なげ)うつ。

列給貢職如郡縣而得奉守先王之宗廟恐懼不敢自陳謹斬樊於期之頭及獻燕督亢之地圖函封燕王拜送于庭使使以聞大王唯大王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮荆軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色變振恐羣臣怪之荆軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首權之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劍劍長操其室時惶急劍堅故不可立拔荆軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時

不及召下兵以故荆軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共

搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也秦王方環柱走

卒惶急不知所爲左右乃曰王負劍負劍遂拔以擊荆軻斷其左

股荆軻廢乃引其匕首以擲秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八

創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生

秦王暗殺未遂事件

こうして荊軻は秦王を追い続けた。

（臣下たちは）慌てていたために、

荊軻を撃つ武器もなく、ただ手で叩

くしか方法がなかった。この時、侍

医の夏無且は、携えていた藥囊を荊

軻に投げつけた。

於期之頭及獻燕督亢之地圖函封燕王拜送于庭使使以聞大王唯大王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮荊軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色變振恐羣臣怪之荊軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首擗之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劍劍長操其室時惶急劍堅故不可立拔荊軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時

不及召下兵以故荊軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共

搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻也秦王方環柱走

卒惶急不知所爲左右乃曰王負劍負劍遂拔以擊荊軻斷其左

股荊軻廢乃引其匕首以擣秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八

創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生

劫之必得約契以報太子也

於是左右既殺軻秦王不怡者良久已而論功賞羣臣及當坐

者各有差而賜夏無且黃金二百溢曰無且愛我乃以藥囊提荊

軻也於是秦王大怒益發兵詣趙詔王翦軍以伐燕十月而拔薊

城燕王喜太子丹等皆率其精兵入保宮秦軍急圍之

秦王暗殺未遂事件

秦王、方に柱を環りて走ぐ。卒かに惶急して為す所を知らず。左右乃ち曰く、「王、劍を負え」と。劍を負い、遂に抜き以て荊軻を撃ち、其の左股を断つ。荊軻、廃る。乃ち其の匕首を引き、以て秦王に擲なげうつ。中らず。銅柱に中る。秦王、復た軻を撃つ。軻、八創を被る。

變振恐羣臣怪之荊軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首擲之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劍劍長操其室時惶急劍堅故不可立拔荊軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時不及召下兵以故荊軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻也秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劍負劍遂拔以擊荊軻斷其左

股荊軻廢乃引其匕首以擲秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得約契以報太子也

漢書蘇林曰荊軻懷匕首之謀而事不就者尺八匕首不足恃也秦王操於不意刻斷負負者介七尺之利也

於是左右既前殺軻秦王不怡者良久已而論功賞羣臣及當坐者各有差而賜夏無且黃金二百溢曰無且愛我乃以藥囊提荊軻也於是秦王大怒益發兵詣趙詔王翦軍以伐燕十月而拔薊城燕王喜太子丹等盡率其精兵東保於遼東秦將下言也擊燕

秦王暗殺未遂事件

秦王は柱の周りを逃げ回り、どうしていいかわからない。すると左右の者が言った「王様、剣を背負ってください」。

剣を背負い、抜いて荊軻に斬りつけ、左股を断った。荊軻は動けなくなり、匕首を秦王に投げつけたが当たらず、銅柱に当たった。

秦王はさらに荊軻に斬りつけ、荊軻は八ヶ所に傷を負った。於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首擲之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劍劍長操其室時惶急劍堅故不可立拔荊軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時不及召下兵以故荊軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻也秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劍負劍遂拔以擊荊軻斷其左

股荊軻廢乃引其匕首以擲秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得約契以報太子也

漢書蘇林曰荊軻懷匕首之謀而事不就者尺八匕首不足恃也秦王操於不意刻斷負負者介七尺之利也

於是左右既前殺軻秦王不怡者良久已而論功賞羣臣及當坐者各有差而賜夏無且黃金二百溢曰無且愛我乃以藥囊提荊軻也於是秦王大怒益發兵詣趙詔王翦軍以伐燕十月而拔薊城燕王喜太子丹等盡率其精兵東保於遼東秦將下言也擊燕

秦王暗殺未遂事件

軻、自ら事の就らざりしを知り、柱に寄りて笑い、箕踞して以て罵りて曰く、

「事の成らざる所以は、生きながら之を劫し、必ず約契を得て、以て太子に報ぜん」と欲するを以てなり。」

是に於いて、左右既に前みて軻を大殺す。

王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮荆軻大樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色變振恐羣臣怪之荆軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子故振懼願大王少假借之使得畢使於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖秦之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首俱之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劔劔長操其室時惶急劔堅故不可立拔荆軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不

得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時不及召下兵以故荆軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劔負劔遂拔以擊荆軻斷其左股荆軻廢乃引其匕首以擣秦王不中中銅柱秦王復擊軻被八創軻自知事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得約契以報太子也

漢書蘇林曰荆軻懷匕首之謀而事不就者尺八匕首不足恃也秦王操於不意列斷負負者介七尺之利也

於是左右既前殺軻秦王不怡者良久已而論功賞羣臣及當坐者各有差而賜夏無且黃金二百溢曰無且愛我乃以藥囊提荆軻也於是秦王大怒益發兵詣趙詔王翦軍以伐燕十月而拔薊城燕王喜太子丹等盡率其精兵東保於遼東秦將李信追擊燕王急代王喜乃遣燕王喜書

秦王暗殺未遂事件

荊軻は計画が失敗したことを知り、柱に寄りかかって笑うと、あぐらをかいてこう叫んだ。

「計画が失敗したのは、（秦王を）生かしたまま約束を取り付け、（燕の）

太子の付託に応えようと考えてしま

ったからだ。」

こうして左右の者が進み出て、荊

軻を殺した。

軻、顧笑舞陽前、謝曰：「北蕃蠻夷之鄙人，未嘗見天子，故振慄。」願大王少假借之，使得畢。使於前，秦王謂軻曰：「取舞陽所持地圖。」軻既取圖，秦之秦王發圖，圖窮而匕首見。因左手把秦王之袖，而右手持匕首，揕之。未至身，秦王驚，自引而起，袖絕。拔劍，劍長，操其室。時惶急，劍堅，故不可立拔。荊軻逐秦王，秦王環柱而走。羣臣皆愕，卒起不意，盡失其度。而秦法羣臣侍殿上者，不

得持尺寸之兵，諸郎中執兵，皆陳殿下。非有詔召，不得上。方急時，不及召下兵，以故荊軻乃逐秦王，而卒惶急無以擊軻，而以手共搏之。是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻也。秦王方環柱走，卒惶急不知所爲。左右乃曰：「王負劍，負劍遂拔，以擊荊軻，斷其左股。荊軻廢乃引其匕首以擣秦王，不中，中銅柱。秦王復擊軻，被八創。軻自知事不就，倚柱而笑，箕踞以罵曰：『事所以不成者，以欲生劫之，必得約契以報太子也。』」

漢書蘇林曰：「荊軻懷匕首，謀而不就，持匕首，不足恃也。秦王操於不意，列斷負負，持介七尺之利也。」

於是左右既前殺軻，秦王不怡者良久。已而論功，賞羣臣及當坐者，各有差。而賜夏無且黃金二百溢，曰：「無且愛我，乃以藥囊提荊軻也。」於是秦王大怒，益發兵詣趙，詔王翦軍以伐燕。十月而拔薊城。燕王喜太子丹等盡率其精兵，東保於遼東。秦將李信追擊燕王，急攻之下，燕王喜太子丹等乃自殺。燕王喜書。

司馬遷はどのような史料をもと
にこの事件を描いたのであろうか。



史記と燕丹子

秦王暗殺未遂事件については、『史記』や『戦国策』が伝える歴史資料のほかに、当時民間で語られていた伝承を記録したと思われるもう一つの史料が伝わっている。『永樂大典』①卷四九〇八に収められた『燕丹子』である。

【解説】

①永樂大典：明の成祖（永樂帝）の勅命により、一四〇三年（永樂元年）から五年の歳月をかけて編纂された類書（歴代の文献を抄録した一種の百科全書）。二万二八七七卷、一万一〇九五冊。『洪武正韻』の韻字の順序に従って項目が配列されている。その後、戦乱などで多くが散逸し、卷四九〇八はドイツのベルリン国立民族学博物館(Museum für Völkerkunde, Berlin)に所蔵されている。

永樂大典

卷四百八十九
之四百九十

二百十

永樂大典卷之二千九百四十八

九真

神

天神

史記：朕奉先帝之遺教，無違焉。倘人謂之天神，與之搏，余人不為行。天神不勝，乃停年之也。孟子：反應章已審，先定以教人，策而無

形容真是其門是謂天紳士紳之無官者謂之天紳未始信物言或遠矣

神聖所宣佈門外之西牆亦不遠處。此處內有和風詩之人。增補。

御紀志武帝時齊人尹翁歸以是仲芳之上上作甘泉宮中為臺室五天池

大一指足伸而置膝其以致天伸居歲餘其方益衰情不至司馬相如

傳緒他以錫爵奉符以行事不為退避之說坐王

紀天神

不

宮中月殿二十五歲三十一日

惟祀天神燭石乃祭日谷之類并祭之

高建王叔立晉簡帝繼位主中興各以二月又

卷之六

燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

燕の太子・丹、秦に質（ち）たり。

秦王、之を遇するに礼なく、意を得ずして、帰るを求めんと欲す。秦王、聴かずして謬言して曰く、「鳥をして頭を白しめ、馬をして角を生えしめよ」と。丹、天を仰ぎて嘆けば、鳥は即ち頭を白くし、馬は角を生ず。秦王、已むを得ずして之を遣る。

永樂大典卷之二萬二千九百二十九

一送

宋

高宗一百七十一

中興聖政建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京以建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京王省以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎漢高帝唐太宗號為盛主然其得天下也以爭其傳天下也義以致亂大我太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得已而履大位及夫為天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非希闊甚盛之際哉六月甲子詔徵猷閣待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珪中書舍人汪藻引故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以江伯房時休記及汪藻



燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

燕の太子である丹は、秦に人質と
なっていた。秦王が冷遇したため、
失望し、帰国したいと願い出た。秦
王はこれを許さず、「鳥が白髪にな
り、馬に角が生えれば（帰国を許し
てやろう）」とふざけて言った。
ところが丹が天を仰いで嘆くと、
鳥は白髪になり、馬に角が生えた。
秦王はやむをえず、帰国を許した。

永樂大典卷之二萬二千九百二十九

一送

宋

高宗一百七十一

中興聖政建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于
南京以建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于
王省以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎
漢高帝唐太宗號為盛主然其得天下也以爭其傳天下也幾以致亂大
武太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得
已而履大位及夫為天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視
天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非布
閭甚盛之際哉六月甲子詔假猷猷間待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏
論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是
命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珪中書舍人汪藻引
故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒
授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以汪藻為時諫記又汪藻



燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

秦王、曰く「軻、起ちて、督亢の
地図を進めよ」と。秦王、図を発く。
凶窮まりて七首出ず。軻、左手で秦
王の袖を把（とら）え、右手で其の胸
を搵（さ）し、之を数えて曰く「足下、
燕に負うこと日に久しく、海内に暴
を貪り、厭き足るを知らず。於期は
罪なくして其の族を夷さる。軻は將
に海内のために讐を報いんとす。今
燕王の母病み、軻と期を促す。吾が
計に従わば生き、従わざれば則ち死
す」と。

永樂大典卷之二萬二千九百二十九

一送

宋

高宗一百七十一

中興聖政草建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于
南京以建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京
王者以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎
漢高帝唐太宗號為盛主然其得天下也以乎其傳天下也幾以致亂大
武太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得
已而履大位及夫為天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視
天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非布
闡甚盛之際哉六月甲子詔徵猷閣待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏
論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是
命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珪中書舍人汪藻引
故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒
授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以汪藻為時諫記又汪藻



燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

秦王は言った。「荊軻よ、起ち上がって、督亢の地図を献上せよ」と。秦王は地図を開いた。地図がすべて開かれると、匕首が出てきた。荊軻は左手で秦王の袖をとらえ、右手でその胸に（匕首）を突き立て、（秦王）を責めて言った。「陛下は、長い間、燕を裏切り、国内各地に戦禍をもたらし、飽くことを知りません。樊於期將軍は罪もなくその一族を殺されました。荊軻は国内の人々のために仇を討ちに参りました。（中略）私の言うとおりすれば生きられますが、従わなければ死ぬことになります。」

永樂大典卷之萬二千九百二十九

一送

宋

高宗一百七十一



中興聖政建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京以建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京王省以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎漢高帝唐太宗號為盛主然其得天下也以爭其傳天下也以義以致亂大我太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得已而履大位及夫為天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非布聞甚盛之際哉六月甲子詔徵猷閣待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珪中書舍人汪藻引故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以汪藻為時諫記又汪藻

燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

秦王曰く「今日の事、子の計に従うのみ。琴の声を聴きて死ぬを乞う」と。姫人を召し琴を鼓しむ。琴の声に曰く「羅縠は単衣、掣して絶つべし。八尺の屏風、超えて越えるべし。鹿盧の劍、負いて抜くべし」と。軻は音を解さず。秦王は琴の声に従い、劍を負いて之を抜き、是に於いて袖を奮いて屏風を超えて走る。軻は匕首を抜きて之を擲（なげ）う（つ）。秦王を決（き）ず（づ）つけ、刃は銅柱に入り、火出ず。

永樂大典卷之二萬二千九百二十九

一送

宋

高宗一百七十一



中興聖政建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于

南京以山陰爲行都建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于

王省以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎

漢高帝唐太宗號爲成王然其得天下也以乎其傳天下也幾以致亂大

武太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得

已而履大位及夫天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視

天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非布

閭甚盛之際哉六月甲子詔徵猷閣待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏

論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是

命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珣中書舍人汪藻引

故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒

授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以汪藻爲時諫記又汪藻



燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

秦王は還りて軻の両手を断つ。軻は柱に寄りて笑い、箕踞して罵りて曰く、
「吾、輕易に坐し、豎子の欺く所となる。燕国、之に報いず、我が事、之に立たざるかな。」

永樂大典卷之二萬二千九百二十九

一送

宋

高宗一百七十一

中興聖政草建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京以建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京王省以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎漢高帝唐太宗號為盛主然其得天下也以爭其傳天下也幾以致亂大我太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得已而履大位及夫為天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非希闊甚盛之際哉六月甲子詔徵猷閣待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珣中書舍人汪藻引故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以江伯房時休記及汪藻



燕丹子（永樂大典卷四九〇八所収）

秦王は戻ると、荊軻の両手を断つた。荊軻は柱によりかかって笑い、あぐらをかいて叫んだ。

「俺がことを侮ったために、こいつに騙されてしまった。燕国に報いることもできず、俺の計画も失敗してしまった。」

永樂大典卷之二萬二千九百二十九 一送

宋 高宗一百七十一

中興聖政草建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京以建炎元年五月庚寅上以四方勸進群臣固請即皇帝位于南京王省以其得天下及其傳天下而知之湯有慚德武未盡善况於後世乎漢高帝唐太宗號為盛主然其得天下也以爭其傳天下也幾以致亂大我太祖皇帝之受命與太上皇帝之中興也謳歌欲訟歸而不釋則不得已而履大位及夫為天下得人則舉成業授焉不詢群臣不謀卜筮惟視天意之所在而已自堯舜以來數千載始有太祖及我太上皇帝豈非布聞甚盛之際哉六月甲子詔徵猷閣待制邢煥授觀察使時諫官衛膚敏論煥后父不當除待制蓋忠厚隆祐太后兄子不當除直學士煥即有是命而上以太后故不忍罷忠厚職名於是給事中劉珪中書舍人汪藻引故事極論之膚敏改中書舍人言所論不行不敢就職明年正月丁未卒授忠厚承宣使且詔后族勿任侍從官著於令以江伯房時休記及汪藻





?

司馬遷が『史記』を書いた当時、
『燕丹子』に書かれているような民
間伝承はすでに存在したのか？

離終身不復近諸侯之人魯勾踐已聞荊軻之刺秦王私曰嗟乎惜哉其不講於刺劒之術也甚矣吾不知人也曩者吾叱之彼乃以我爲非人也

太史公曰世言荊軻其稱太子丹之命天雨粟馬生角也大過又言荊軻傷秦王皆非也始公孫季功董生與夏無且游具知其事爲余道之如是自曹沫至荊軻五人此其義或成或不成然其立意較然不欺其志名垂後世豈妄也哉

司馬遷が聞いた民間伝承

太史公、曰く、

「世に荊軻を言うに、其の太子・丹の命を称し、天、粟を雨らし、馬、角を生ずるなりと。太（はなは）だ過（あやま）てり。又言う、荊軻、秦王を傷つくと。皆非なり。始め公孫季功、董生、夏無且と游（まじわ）り、具（つぶ）さに其の事を知り、余の為にこれを道（い）うこと是の如し。」

離終身不復近諸侯之人魯勾踐已聞荊軻之刺秦王私曰嗟乎惜哉其不講於刺劒之術也甚矣吾不知人也曩者吾叱之彼乃以我爲非人也

太史公曰世言荊軻其稱太子丹之命天雨粟馬生角也大過又言荊軻傷秦王皆非也始公孫季功董生與夏無且游具知其事爲余道之如是自曹沫至荊軻五人此其義或成或不成然其立意較然不欺其志名垂後世豈妄也哉

司馬遷が聞いた民間伝承

「世間では、荊軻のことを語るとき、燕の太子・丹の命で、天は粟を降らし、馬は角を生やしたというが、これはでたらめである。また、荊軻は秦王を傷つけたともいうが、これも誤りである。以前、公孫季功や董生は（秦王の侍医であつた）夏無且と交友があり、当時のようにすを詳しく知っていたので、以上のように私に話してくれた。」

史記荊軻伝の材料

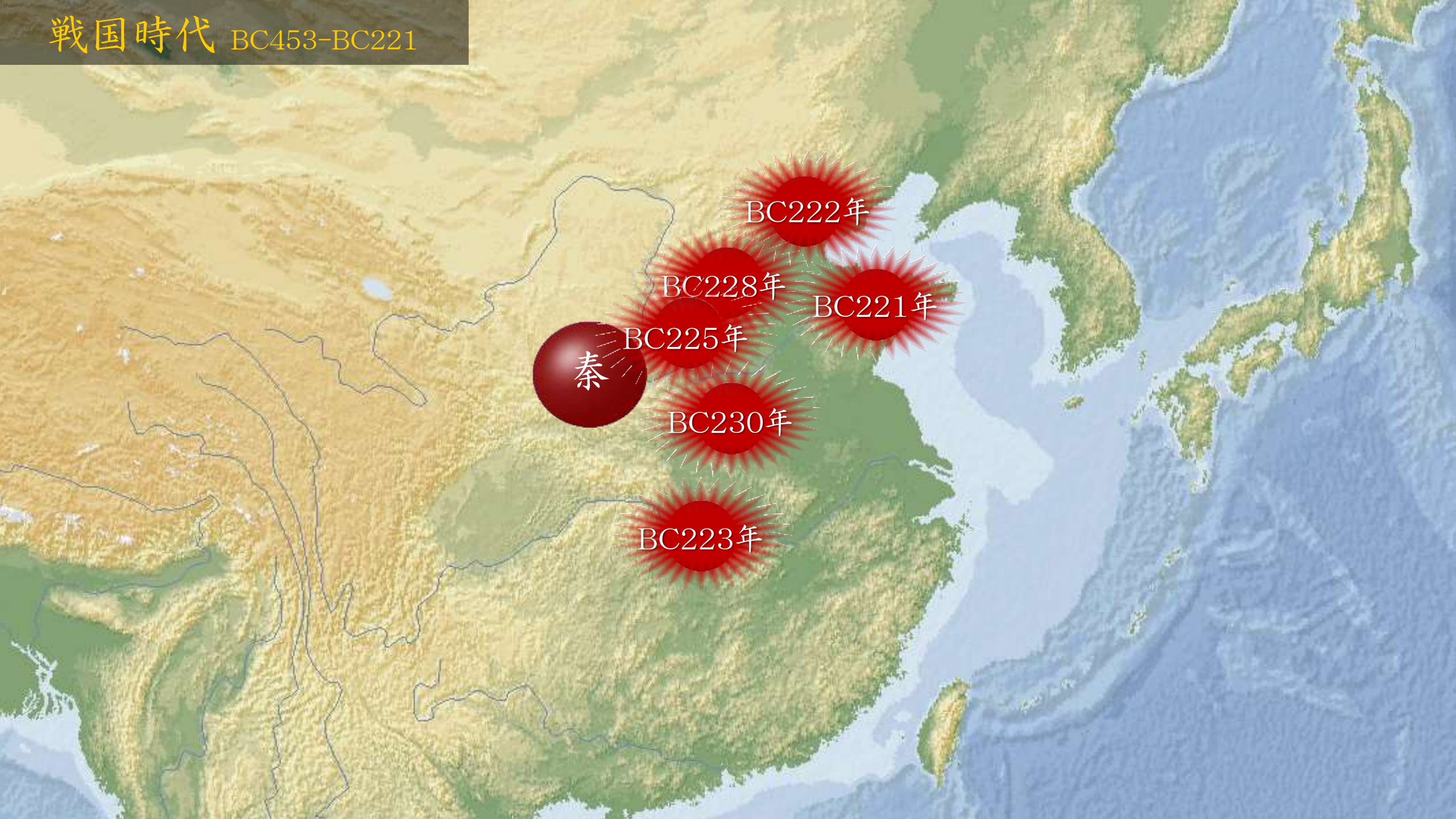
「司馬遷の荊軻伝の材料は、むしろ世言、即ち世のいい伝えの中から採ったに違いない。ただ、彼は無差別に世言を取ったのではなく、これに批判を加え、あまりに神怪なこと、明らかに反証のあることを排斥した。そして夏無且の言はその反証の一にすぎなかったわけである。」

宮崎市定「身振りと文学」



宮崎市定 (1901～1995)

戦国時代 BC453-BC221



BC222年

BC228年

BC221年

BC225年

秦

BC230年

BC223年

1600BC
1500BC
1400BC
1300BC
1200BC
1100BC
1000BC
900BC
800BC
700BC
600BC
500BC
400BC
300BC
200BC
100BC
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

殷 1600BC頃-1046BC		
周 1046BC-771BC		
春秋戦国時代 770BC-221BC		
秦 221BC-207BC		
漢 206BC-220AD		
魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
晋 265-316		
五胡十六国時代		東晋 317-420
北朝 439-589		南朝 420-589
隋 581-619		
唐 618-907		
五代十国 907-960		
遼	北宋 960-1127	
金 1115-1234	南宋 1127-1279	
元 1271-1368		
明 1368-1644		
清 1616-1912		
中華民國 1912-1949		
中華人民共和國 1949-		

法家思想によつて天下統一を實現した秦であつたが、孔子がかつて予言したとおり、苛酷な嚴罰主義はやがて民衆の反乱を招き、わずか十五年で滅亡した。

秦の後を受けた漢王朝は、儒家思想を国教化し、四百年に及ぶ秩序ある安定した社会を築いていく。

秦の滅亡

儒教の徳治主義Ⅱ 「徳」と「礼」

子曰く、之を道（みちび）くに政を以てし、之を齊（と）のうるに刑を以てすれば、民は免れて恥無し。之を道（みちび）くに徳を以てし、之を齊（と）のうるに礼を以てすれば、恥あり且つ格（ただ）す。

子曰詩三百包曰篇之大數一言以論語為政第二猶當也曰思無邪包曰歸於正子曰至無邪為政之道在於去邪歸正故舉詩要當一句以言之詩三百者言詩篇之大數也一言以蔽之者猶當也也古者謂一句為一言詩雖有三百篇之多可舉一句當盡其理也曰思無邪者此詩之一言魯頌駉篇

子曰道之以政文也詩之為體論功頌徳止辟防邪大抵皆歸於正政者有三百五篇故此一詩可以當之也子曰政謂法教齊之以刑曰案今毛詩序凡三百一十一篇內六篇亡今其存者有三百五篇今但言三百篇故曰篇之大數子曰道之以政子曰至無恥民免而無恥孔曰免苟免道之以徳子曰至且格齊之以禮有耻且格包曰徳謂道德齊之以禮有耻且格子曰至且格之子曰至且格政子曰至且格教子曰至且格命子曰至且格而子曰至且格民子曰至且格恥子曰至且格巧子曰至且格省子曰至且格恥子曰至且格民子曰至且格或子曰至且格未子曰至且格格子曰至且格從子曰至且格化子曰至且格則子曰至且格制子曰至且格禮子曰至且格以子曰至且格齊子曰至且格整子曰至且格使子曰至且格民子曰至且格知子曰至且格有子曰至且格禮子曰至且格則子曰至且格安子曰至且格失子曰至且格禮

現代中国における秦の評価

中学歴史教育の暗記法（口訣記憶）

公元前二二一（紀元前二二一年）

秦灭六国有大功（秦は六国を滅ぼし

大功あり）

都城设在咸阳城（都城を咸陽城に設け）

中华民族得安宁（中華民族は安寧を得た）

人民教育出版社版『初級中学歴史上冊』教案

1600BC	殷 1600BC頃-1046BC		
1500BC			
1400BC			
1300BC			
1200BC			
1100BC			
1000BC	周 1046BC-771BC		
900BC			
800BC			
700BC			
600BC	春秋戦国時代 770BC-221BC		
500BC			
400BC			
300BC			
200BC			
100BC	秦 221BC-207BC		
0	漢 206BC-220AD		
100			
200			
300			
300	魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
400	晋 265-316		
400	五胡十六国時代		東晋 317-420
500	北朝 439-589		南朝 420-589
600	隋 581-619		
700	唐 618-907		
800			
900			
1000	五代十国 907-960		
1100	遼	北宋 960-1127	
1200	金 1115-1234		南宋 1127-1279
1300	元 1271-1368		
1400	明 1368-1644		
1500			
1600			
1700	清 1616-1912		
1800			
1900			
2000	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和国 1949-		

新疆ウイグル自治区

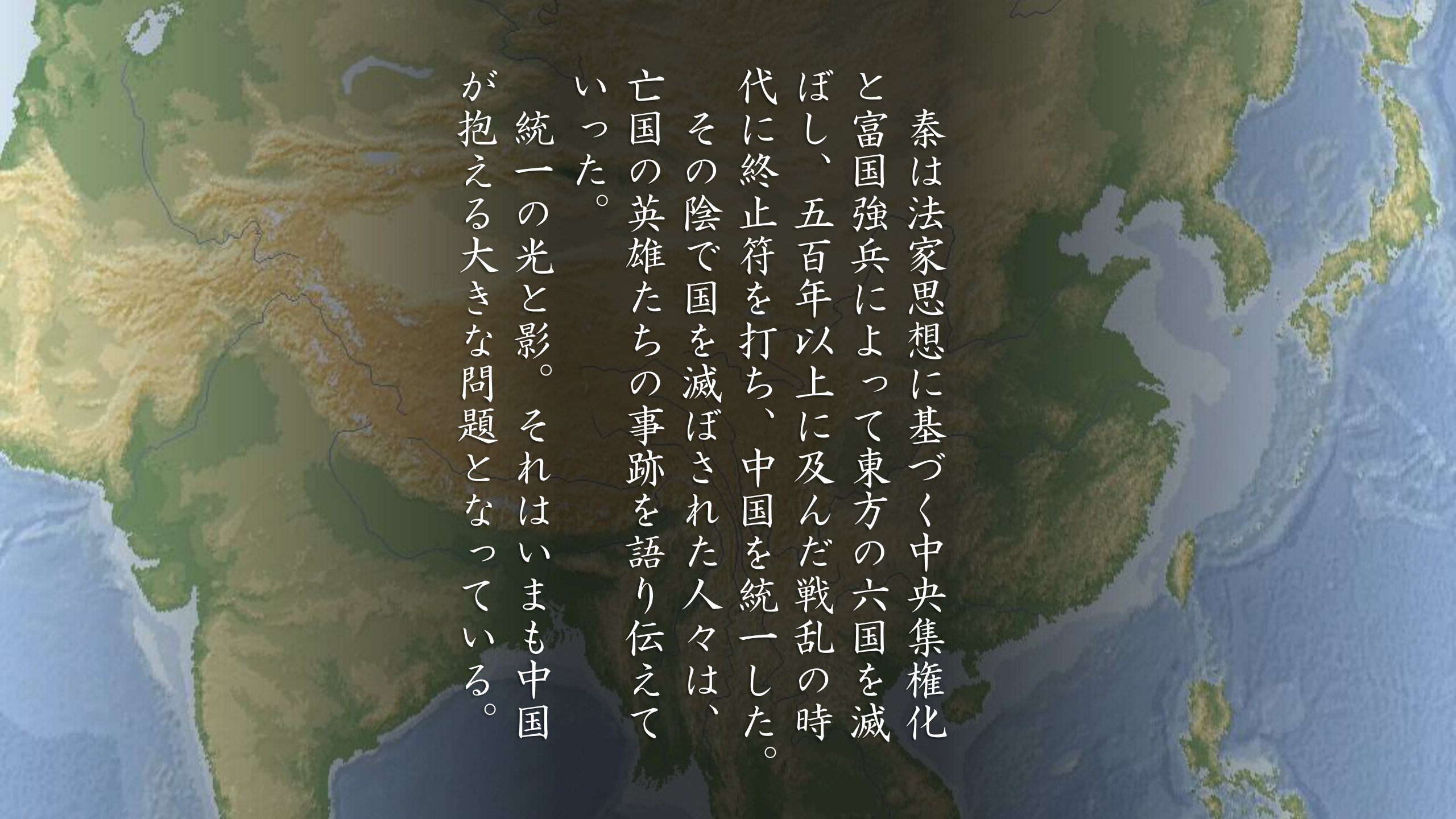
チベット自治区

Dharamshala



秦は法家思想に基づく中央集権化と富国強兵によって東方の六国を滅ぼし、五百年以上に及んだ戦乱の時代に終止符を打ち、中国を統一した。その陰で国を滅ぼされた人々は、亡国の英雄たちの事跡を語り伝えていった。統一の光と影。それはいまも中国が抱える大きな問題となっている。

台湾



秦は法家思想に基づく中央集権化
と富国強兵によって東方の六国を滅
ぼし、五百年以上に及んだ戦乱の時
代に終止符を打ち、中国を統一した。
その陰で国を滅ぼされた人々は、
亡国の英雄たちの事跡を語り伝えて
いった。

統一の光と影。それはいまも中国
が抱える大きな問題となっている。

ウイグル族、強い不満

中国新疆ウイグル自治区の爆発事件が起きた区都ウルムチでは2日、地元警察当局が容疑者とされる人物の死亡を発表後も、ウイグル族への取り締まりを強めている。ウイグル族たちは多数の死傷者を出した爆発事件の容疑者らに憤りを感じているが、少数民族に不利な中国の社会構造に対する強い不満も口にした。

爆発事件のウルムチ



事件が起きたウルムチ南駅周辺の各ホテル玄関では、制服姿の当局者が、出入りする宿泊客に厳しい視線を送る。ウイグル族の宿泊希望者が訪れると、追い払う姿も見られた。大手ホテルのフロント係は「私たちににとっては同じ大事な客なのに」と嘆く。

ウイグル族が集まる地域では、警察車両や装甲車が路上に停車。当局者が道行く人の警戒を続けている。

事件後初めてのイスラム教週末礼拝を迎えたこの日、市中心部のモスクでは、敷地からあふれるほどの信者が詰めかけた。周囲

爆発事件後、初めてのイスラム教の週末礼拝となった2日、モスク前で信者たちを監視する警察官たち。そばには銃を持った部隊10人ほどが待機する詰め所もあった。新疆ウイグル自治区ウルムチ、石田耕一郎撮影

漢族が主流を占める政府側とウイグル族は長年、摩擦を繰り返してきた。背景には宗教や言語など民族のアイデンティティーにかかわる面の制約や、経済格差などへの強い不満がある。

中国政府は二〇〇一年、漢族の言葉である漢語の小学校からの普及教育を導入。民族語での教育が可能だった理科や算数などの教科も、すべて漢語指導に変更した。一方、漢族が少数民族言語を学ぶ機会は大学などに限られる。

朝日新聞二〇一四年五月三日朝刊より



線を送る。ウイグル族の宿泊希望者が訪れると、追いつめる。ウイグル族は「私たちが」としては同じ大事な客なの」と嘆く。

ウイグル族が集まる地域では、警察車両や装甲車が路上に停車。当局者が道行く人の警戒を続けている。

事件後初めてのイスラム教週末礼拝を迎えたこの日、市中心部のモスクでは、敷地からあふれるほどの信者が詰めかけた。周囲

爆発事件後、初めてのイスラム教の週末礼拝となった2日、モスク前で信者たちを監視する警察官たち。そばには銃を持った部隊10人ほどが待機する詰め所もあった。新疆ウイグル自治区ウルムチ、石田耕一郎撮影

習近平政権は相次ぐ衝突を受け、民族間の団結を強調する一方、少数民族側の不満には抑圧で対抗している。

ウルムチの繁華街で、漢族の常連客も多い民族料理店を営む二〇代のウイグル族の男性は、周囲を見回して当局者がいないことを確かめた上で語った。

「ウイグル族が望むのは、漢族と同様に、自由に話せる環境と平和で幸せな生活なんだ」

朝日新聞二〇一四年五月三日朝刊より



入る宿泊客に厳しい視線を向ける。泊希望者が訪れると、追い払う姿も見られた。大手ホテルのフロント係は「私たちにとっては同じ大事な客なのに」と嘆く。

ウイグル族が集まる地域では、警察車両や装甲車が路上に停車。当局者が道行く人の警戒を続けている。

事件後初めてのイスラム教週末礼拝を迎えたこの日、市中心部のモスクでは、敷地からあふれるほどの信者が詰めかけた。周囲

爆発事件後、初めてのイスラム教の週末礼拝となった2日、モスク前で信者たちを監視する警察官たち。そばには銃を持った部隊10人ほどが待機する詰め所もあった。新疆ウイグル自治区ウルムチ、石田耕一郎撮影

まとめ

一. 法家思想による中央集権化と富国強兵策によって圧倒的な軍事力を持つようになった秦は、秦王政（のちの始皇帝）の時代、わずか十年足らずの間に、東方の国々を次々と滅ぼしていった。

二. 秦の軍事的脅威が迫る中、たった一本の匕首で敢然と秦に立ち向かった荊軻の物語は、さまざまに神話的モチーフを加えながら後世へと語り継がれていった。

三. 荊軻の事跡は、史記や戦国策などの史書に記録される一方、燕丹子（永楽大典巻四九〇八）には、当時の民間伝承と考えられる物語が記録されている。

参考文献

- 一. 陳舜臣『ものがたり史記』（朝日文芸文庫一九八三年）
- 二. 田中謙二、一海知義『中國古典選一九史記（二）』（朝日文庫一九七八年）
- 三. 『燕丹子』（中華書局一九八五年未翻訳）
- 四. 宮崎市定「身振りと文学」（京都大学・中国文学報一九六五年）
↓『宮崎一定全集』第五卷）